SINCE 1971
JSWH
The Japanese Society for Wound Healing
NEWS LETTER
日本創傷治癒学会
2013.7
No.76

2013年 SAWC/WHS 学術集会参加記

東邦大学大学院医学研究科
先端医科学研究センター 組織修復･病態制御学部門 赤坂 喜清

2013年度のSAWC/WHS学術集会は2013年5月1日から5日まで米国コロラド州デンバー市のColorado Convention Centerで開催された。デンバー市は“マイル・ハイ・シティー The Mile High City”と呼ばれるほど高地（海抜1600m）であり気圧が低く球技の飛距離が伸びる。実際MLB球場である“クアーズフィールド”は全米で一番打球がよく飛ぶことで有名である。旅行誌で収集したデンバーの情報は少なく不安であったが、デンバー国際空港に降り立つと高地特有の透き通った空気と遥か遠くに聳えるロッキー山脈の白い頂きを見て、清々しい気持ちで一杯になった。

学術集会はColorado Convention Centerで開催された。この建物は1990年に建築家とミーティングプランナーの協議によりデザインされたシンプルな建物であり、ガラス張りのオープンな外観とダウンタウンの交通要所に位置し、会議のみならず市民の憩い場として愛されている。特にデンバー市推奨のパブリックアートの一環として40フィートのクマの彫刻「ビッグブルーベアー」が入り口に建造され、目を見張るとともに文化芸術を振興するデンバー市民の意気込みを感じた（図1）。

WHSは大変アカデミズムの高い学術集会であり、従来は単独開催による小さな会場で常に熱い議論が繰り広げられてきた。最近はSAWC（Symposium on Advanced Wound Care）との共同開催となり、医師や数多くの看護師の皆様が参加する大規模な合同学術集会（SAWC/WHS）に発展している。したがって開催規模が大きく、運営面で感心させられる点が多々あった。参加受付を簡便にする二次元バーコードが開催前に

【図1】SAWC/WHSが開催されたColorado Convention Center。
開催初日には雪が降り、会場周囲に掲げてある野外フラグ（手前）や会場入り口のビッグブルーベアー（右手、奥）にも雪が積もった。

●日本創傷治癒学会事務局
〒160-8582
東京都新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部外科学教室内
tel.03-3351-4774
fax.03-3355-4707
e-mail: info@jswh.com
URL : http://www.jswh.com

電子メールで送られ、会場ではスマートフォン普及によりGoogle PlayやApple Storeから抄録をダウンロードするなどアメリカで普及するインターネットコンテンツの技術を学会に即反映させる姿勢には感心した。

SAWCとの共同開催とはいえWHSは独自のプログラムを提供しており、日本の学会同様に重要課題のセッションが設けられ、WHS選定の演者が講演された。多くの演者は機関誌Wound Repair and Regenerationで拝見する先生であり、最新内容の発表を期待していたが総論的な内容に少々ガッカリした。セッション会場では第42回日本創傷治癒学会のJSWH-WHS Joint Session演者であるKenichi Tamama先生にお会いした。彼の話では米国の年3回のNIHグラント申請では本学術集会の演者の多くが採択審査に関係し、彼らの講演内容は今後の申請内容や方向性、採択基準を把握するのに重要だという。米国の競争的研究資金獲得に学術集会がより直結しているような印象を受け、今後の学術集会の方向性について考えさせられた。

今回初めて小野一郎先生と一緒に参加させて頂いた。小野先生は故大谷吉秀先生と一緒にWHSに参加され、その参加歴は長くボルチモア、シアトル、リモージュ、ダラス、アトランタのWHSに参加されている。特にダラスでは第1回JSWH-WHS Joint Sessionが開催され、おりしも新型インフルエンザ流行により渡米するのに大変御苦労されたりしたものの、JSWHとWHS間を取り次ぐ大役を長年務められてきた。小野先生が大会長を務められた第42回日本創傷治癒学会では第2回JSWH-WHS Joint Sessionが開催され、WHSよりDr. Laura Parnel, Dr. Lisa Goulds, Dr. Kenichi Tamamaが参加され、JSWHとWHSとの深い交流が進展した。そして半年後に開催された今回の大会に私どもが参加することで、JSWHとWHSの関係がより親密なものに近づいた感がした。最終日に昨年度横浜で開催されたWUWHS(World Union of Wound Healing Societies)の講演者でありWHSのBoard memberであるSundeep Keswani氏とKenneth Liechty氏にお会いした(図2)。別れ際に彼らが「来年のWHSはオーランドで開催されるので来てくれ」と何度も言っていたのが印象的だった。来年のSAWC/WHSは若い先生と一緒に参加し新たな創傷治癒学を研鑽するもの同士の国際交流の場をさらに広げたいという強い思いを抱いてデンバー空港から帰国の途に就いた。

【図2】WHS主催の懇親会風景。デンバー特産のビールと気圧の低さで酔いがまわった。左からKenneth Liechty、筆者、小野一郎、Sundeep Keswani。

●腸管通過障害に伴う腹痛、腹部膨満感に効果があります。[1)～4)]

●次の3つの機序による腸管運動亢進作用を示します。
1）セロトニン3型、4型受容体を介するアセチルコリン遊離促進（イヌ、ラット、*in vitro*）[5)～7)]
2）消化管運動亢進ホルモンであるモチリンの分泌促進（ヒト）[8)]
3）知覚神経におけるTRPV1チャネルを介した作用（*in vitro*）[9)]

●CGRP、アドレノメデュリンを介して腸管（小腸、大腸）血流量を増加させます。（ラット）[10)11)]

●アドレノメデュリンなどを介した抗炎症作用を示します。（マウス）[12)]

●副作用発現頻度調査（2010年4月～2012年3月）において、3,284例中、64例（1.9%）72件に臨床検査値の異常を含む副作用が報告されました。（ラット）[13)]

●重大な副作用は、間質性肺炎、肝機能障害、黄疸（いずれも頻度不明）です。

TRPV1：transient receptor potential V1　CGRP：calcitonin gene-related peptide

効能又は効果
腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

用法及び用量
通常、成人1日15.0gを2～3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

使用上の注意（全文記載）
1.慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）　肝機能障害のある患者［肝機能障害が悪化するおそれがある。］　2.重要な基本的注意　(1)本剤の使用にあたっては、患者の証（体質・症状）を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。　(2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。　3.副作用　副作用発生状況の概要　副作用発現頻度調査（2010年4月～2012年3月）において、3,284例中、64例（1.9%）72件に臨床検査値の異常を含む副作用が報告された。　(1)重大な副作用
1)間質性肺炎（頻度不明）：咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常等があらわれた場合には、本剤の投与を中止し、速やかに胸部X線、胸部CT等の検査を実施するとともに副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。2)肝機能障害、黄疸（頻度不明）：AST（GOT）、ALT（GPT）、Al-P、γ-GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
(2)その他の副作用

	頻度不明	0.1～5%未満	0.1%未満
過敏症[注1)]			発疹、蕁麻疹等
肝　臓		肝機能異常（AST（GOT）、ALT（GPT）、Al-P、γ-GTP等の上昇を含む）	
消化器	腹痛	悪心、下痢	腹部膨満、胃部不快感、嘔吐

注1）このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

4.高齢者への投与　一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。　5.妊婦、産婦、授乳婦等への投与　妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。　6.小児等への投与　小児等に対する安全性は確立していない。［使用経験が少ない］

*その他の詳細につきましては製品添付文書をご覧下さい。

［文献］1）Yoshikawa, K. et al. Surg Today. 2012, 42（7）,p.646.　2）壁島康郎ほか. 日消外会誌. 2005, 38（6）, p.592.　3）三木誓雄ほか. Prog Med. 2000, 20（5）, p.1110.
4）Horiuchi. A. et al. Gastroenterol. Res. 2010, 3（4）,p.151.　5）Shibata, C. et al. Surgery. 1999, 126（5）, p.918.　6）Satoh, K. et al. Dig.Dis.Sci. 2001, 46（2）, p.250.
7）Tokita, Y. et al. J Pharmacol Sci. 2007, 104（4）, p.303.　8）Nagano,T. et al. Peptide Science 1998.1999, p.329.　9）株式会社ツムラ社内資料
10）Kono,T.et al. J Surg Res.2008,150（1）,p.78.　11）Kono,T.et al. J Gastroenterol.2011,46（10）, p.1187.　12）Kono,T.et al. Journal of Crohn's and Colitis. 2010,4（2）,p.161.
13）香取征典ほか. Prog Med.2012.32（9）,p.1973.

株式会社ツムラ　http://www.tsumura.co.jp/
●資料請求・お問い合せは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。Tel.0120-329-970　（2013年1月制作）

■使用上の注意等の改訂には十分ご留意下さい。　VO-1001